請願者

（舞台は富裕な男の執務室。背後に、巨大なスピーカー。観客席が暗くなると、幕は閉じたまま、スピーカーから前口上が流れる）「昔、あるところに、金持ちの男がおりました。その男の息子はわがままな子でしたが、父親のお気に入りでした。ある時、庶民階級の貧しい男が借金の申し込みにやって来ました。その時の一部始終は本来、悲劇だったでありましょう。もし、あんなにたくさんの滑稽なことが起きてなかったなら」

（幕が上がると、指物師ブラントシュテッター（カール・ファレンティン）が尋ねている声が聞こえる）枢密顧問官殿はご在宅でしょうか？

ファニー（女中）　枢密顧問官殿はただ今、不在でございます。もっとお近くにどうぞ。

ブラントシュテッター（登場する）　それならお帰りになるまで待たせていただきます。どちらに行かれたんですか？

ファニー　枢密顧問官殿は遠足に出かけておられます。ですが、もうそろそろ帰られる頃です。どちら様でいらっしゃいますか？

ブラントシュテッター　ブラントシュテッターと申します。

ファニー　どのようなご用件でしょうか？

ブラントシュテッター　民間――私用です。

ファニー　承知いたしました。枢密顧問官殿がお帰りになり次第、お取り次ぎいたします。ここでお待ち下さい。（退場）

ブラントシュテッター　ああ、百マルクで助かるんだがな、やっぱり百五十は要るかな。

枢密顧問官（登場する）　ファニー、郵便は来たかね？

ファニー　いいえ。でもお客様が見えてます。

枢密顧問官　ほお、誰かね？

ブラントシュテッター　お邪魔してます、枢密顧問官殿。（傘を足の上に落とす。ファニーがそれを拾い上げ、逆向きに彼の手に渡す）

枢密顧問官　何を探してるんだ？

ブラントシュテッター　柄が見つからないんです。

枢密顧問官　そこにあるだろう。（帽子と外套をファニーに渡す）どうしてこんな奴を家に入れたんだ？！　毎日お前は何かしらへまをやるな。食う以外、使いものにならんのだから。

（ファニーは退場する）

ブラントシュテッター　あの子、まだそんなに食ってないでしょう。

枢密顧問官　いったい何なんだね？（座る）その傘と帽子をどこかに掛けたまえ。（ブラントシュテッターは辺りを見回し、途方に暮れ、ポケットから釘と金槌を取り出して、箱型大時計の側面に釘を打ち込み、それに帽子を掛ける。顧問官はこの間、書類に目を通しており、それから黙って眺めていたが立ち上がる）おい、何を考えてるんだ？　君の帽子を下ろしたまえ。うちのぴかぴかの家具に釘を打ち込むなんて！　すぐに帽子を下ろすんだ！

ブラントシュテッター　また下ろすんですか。せっかく釘を打ったのに。

枢密顧問官　君は、どこに行ってもあたり構わず釘を打ち込むのかね？

ブラントシュテッター　いいえ、洋服掛けが見当たらない時だけです。

枢密顧問官　座りたまえ。

ブラントシュテッター　では、遠慮なく。（ソファに座るが滑り落ちてしまう）

枢密顧問官　そこじゃない！（ブラントシュテッターが舌打ちをすると椅子（紐がついている）がひとりでに書き物机のところまで移動する。ブラントシュテッターはその椅子に座る）

枢密顧問官　こんな馬鹿なことってあるか！　さて、わしに何の用だね？

ブラントシュテッター　はい、私はブラントシュテッターと申します。指物師をやっております。私たち、お知り合いだと思いますが。

枢密顧問官　わしは君にこれまでに会ったことはないが。

ブラントシュテッター　いえ、あるはずですよ。七、八年前、市電でノイハウザー街を通ったことがありませんか？　あの時、私たち、後部デッキで向かい合わせに座っておりました。

枢密顧問官　第一に、デッキには座れない、第二に、わしは市電などには乗らない。いつも自動車だ。

ブラントシュテッター　それじゃあ、どこか自動車の中でお会いしたにちがいありません。

枢密顧問官　だが、自動車にはデッキなどないぞ。

ブラントシュテッター　ええ、ないですね。私はあなたのお話に合わせますから、蜂蜜注文官殿――いや、枢密顧問官殿。

枢密顧問官　ああ、思い出した。もちろんわしは君を知っておるよ。君は四年前に――

ブラントシュテッター　そうです、そうです。

枢密顧問官　しまいまで言わせなさい。君は四年前に、わしの友人のレンブレーマーデング男爵のところで庭師をやってなかったかね？

ブラントシュテッター　はい、レンブレーマーデング男爵のところで庭師をしてました。といっても、実は庭師そのもの（ディレクター）ではなかったんですがね。つまり、私は管理人（ディレクター）でもなく庭師でもなかったんです。噴水栓開け人だったんです。

枢密顧問官　噴水栓開け人、ね。それもやっぱり職業なのかね？

ブラントシュテッター　職業とは言えないでしょうね。アルバイトってところでしょう。年に二マルクもらうだけですから。

枢密顧問官　年に二マルク？　それじゃあ生活できんだろう。

ブラントシュテッター　まあ、一応はできますが。

枢密顧問官　わしにはまったく理解できないな。

ブラントシュテッター　つまり、やりくりすれば。

枢密顧問官　だが、年に二マルクしか稼がないで、可能かね？

ブラントシュテッター　ご興味をお持ちなら、お話いたしましょう、黒密注文官殿、枢密顧問官殿。こんな風でした。レンブレーマーデング男爵は庭園に、ええと、あの、何と言ったか、あれ、あれを一つ持っていらしたんです、フ、フ……

枢密顧問官　藤棚？

ブラントシュテッター　いいえ、フ、フ……――外国語でした――フ、フ……

枢密顧問官　フェンス？

ブラントシュテッター　いいえ――ちがいます――おっと、思い出しました。

フ、ファウンタインです。

枢密顧問官　ファウンテンのことかね？

ブラントシュテッター　そうです。うちの方では噴水と言ってますがね。で、この噴水の栓を私は毎年、春に開けるんです。すると秋まで水を吹いています。そして冬になると、また栓を閉めます。それで、私は栓開けに一マルク、栓閉めにまた一マルクもらうんです。合わせて二マルクです。

枢密顧問官　あのな、ブラントシュティフター（放火犯の意）さん――

ブラントシュテッター　――シュテッターです。

枢密顧問官　ブラントシュテッターさん、そんな二回のちょっとした用事にしては二マルクというのは結構な額だと思うがね。

ブラントシュテッター　もちろん結構な額です。レンブレーマーデング男爵に文句を言ったことなどありません。ただ数が少なすぎますよね。

枢密顧問官　どういうことかね？

ブラントシュテッター　こう思うんです。もしレンブレーマーデング男爵の庭園にああいう噴水が千あったなら、そして毎日、栓を開閉しなければならないのなら、日に二千マルクになったろうにって。これならたいした仕事です。

枢密顧問官　でも、君、今時、噴水を千も持つようなぜいたくをできる人などいはせんよ。

ブラントシュテッター　ええ、おりませんね。

（電話が鳴る）

枢密顧問官　もしもし、枢密顧問官ミュラーだが。

ブラントシュテッター　ええ、それで私、こうして、こちらにうかがったのです――と言いますのは、うちにも庭がありまして、そしてそこにも噴水があるんです。でも、小さい、ほんの小さいのですがね――

枢密顧問官　わしが話してる時は静かにしてくれたまえ――もしもし、どなたですかな？――静かにしてくれたまえ。ああ、ジーベンマイヤーさんですか、三週間前からお電話をお待ちしてました。とても大事なことなんです。じゃあ、話して下さいよ、何ですって、株がまた上がったんですか？　それは大変興味深いですな。（ブラントシュテッターは電話機をじっと見ている。そして、傘をその上に置く）もしもし！　切れてしまった。（傘が目に入る）おい、いったい

何をやらかすんだね、子供みたいに。通話が切れちまったぞ。どうして、君のそのろくでもない傘をこの上に載せたりしたんだね。（傘を投げ下ろす）

ブラントシュテッター　だって、顧問官殿もそれをその上に載せるじゃありませんか。

枢密顧問官　これは受話器だ。君は卓上電話機というものを見たことがないのかね？

ブラントシュテッター　ええ、こんな新型のガラクタ、知りません。

枢密顧問官　これがいったい何に見えたのかね？

ブラントシュテッター　量りだと思いました。

枢密顧問官　馬鹿な。君のへぼ傘の重さなんて、誰も知りたいと思わんぞ。

ブラントシュテッター　半ポンドくらいだと思いますよ。

（電話が鳴る）

枢密顧問官　ほら、また静かにしてくれたまえ。もしもし、ああ、ジーベンマイヤーさん。中断してしまいましたな。私、ちょっといらいらしてるんです。うるさい客が来てましてね。でも、さっきの件、是非、今、話して下さい。

（ブラントシュテッターは人差指で五、六回、受話器掛けを押す）

枢密顧問官　おい、また何をするんだ、馬鹿者。もしもし！　また切れてしまった。何をやってるんだ？

ブラントシュテッター　ちょっと突ついてみただけですけど。

枢密顧問官　信じられん。（電話をかける）君は頭にきてるのか？

ブラントシュテッター　いえ、お宅に来ています。

枢密顧問官　いったい何を考えてるんだ！　はい、こちらミュラーだが。あの、ジーベンマイヤーさん――

ブラントシュテッター　これってそんなに感度がいいんですか？　私が手を伸ばしただけで（手を伸ばす）、向こうの人はいなくなってしまうんですか？

枢密顧問官　何てこった、こりゃあ気狂い沙汰だ！

ブラントシュテッター　どうして、向こうの人は私がこれを突ついたってわかるんです？

枢密顧問官　わしは君に、電話の長所短所を説明してやる義務があるのかね？　君に講義をしてやらねばならんのかね？　まあいい、用件に戻ろう、君

の用事はいったい何なのだ？

ブラントシュテッター　ええ、申しましたように、苦労がつきないんです。子供らは学校に行かねばなりません。女房は具合が悪いんです。わかっていただけると思うんですが、昨晩から今朝にかけて四晩も眠ってないんです。そこで顧問官殿にお願いがあるのです。お金を――

坊や（リースル・カールシュタット）（水兵服を着て、ラジオ番組表を持って、入って来る。ファニーがついてくる）　ファニー、僕の部屋に行って、大きいラジオ番組表を取って来ておくれよ。ねえ、パパ、今、僕、番組表で見たんだけど、きょうウィーンで大きなサッカー試合があるんだって。それを聞きたいんだよ。でも僕のラジオじゃ、ウィーンは聞こえないの。それで今、屋根の上に新しいアンテナを立てようと思ったんだけど、おばあちゃんが僕といっしょに屋根に登ってくれないんだ。

枢密顧問官　そりゃあ、当然だよ。おばあちゃんは、あしたで八十七歳になるんだぞ。

坊や　だって、そんな年なら、落っこったって、惜しくないじゃない。

枢密顧問官　そんなことは言うもんじゃない。屋根の上にアンテナを立てる必要なんぞないさ。なくても大丈夫だ。ちゃんとダイヤルを合わせてないんだろう。

坊や　ちゃんと合わせたよ。ほら、自分で聞いてみて――（スイッチを入れる。ガーガーいう）

枢密顧問官　ひどい音だ。

坊や　僕のアンテナじゃ十分じゃないんだ。雑音しか聞こえない。

（ブラントシュテッターがひどく大きな音をたてて鼻をかむ）

枢密顧問官　実にいい音だ。

ブラントシュテッター　お宅の蓄音機と同じですな。

坊や　これは蓄音機じゃないよ、ラジオだよ。

枢密顧問官　それじゃあ、今、坊やのために屋内アンテナを注文してやろう。

（電話する）こちら、枢密顧問官のミュラーだがね、二、三週間前にお宅でラジオを買ったんだよ、うちの坊主のためにね。それで今、坊主がウィーンからの放送を聞きたがってるのだ、サッカー試合なんだがね、でもそれができない。

ウィーンの放送が入らないんだ、雑音がするばかりでな。ガーガー、それはもうひどいんだ。

ブラントシュテッター　私とおんなじだ。私もいつも雑音がひどいんです。腸の具合が悪くて。

枢密顧問官　静かにしてくれたまえ。

坊や　パパの邪魔をしないでよ。

枢密顧問官　静かに！　すると屋外アンテナが必要ですかな？　必要ない。屋内アンテナで間に合うんですな。わかった。ありがとう。それじゃ失敬、ヘーリング（ニシン）さん。

ブラントシュテッター　頓馬な名前だ。まあ、それでもロールモップス（ニシンマキ）っていうのよりはましだな。

坊や　ハハハ。

枢密顧問官　下らぬ話はやめろ。坊や、屋外アンテナは要らないそうだ。簡単な屋内アンテナでいいって。だから、部屋の中にただ線を張ればいいのさ。それがアンテナの役をするのだ。

坊や　わかった。じゃあ、線をすぐに取って来る。だから部屋の中を片付けといて。アンテナを張るからさ。すぐに戻るよ。（退場）

枢密顧問官　うちの息子はわしの自慢さ！　本当に活発でな。機械にとても興味を持ってるんだ。君もそう思うだろ？

ブラントシュテッター　ええ、ええ、子供は皆、ラジオが大好きですね。

枢密顧問官　君にも子供がいるのかね？

ブラントシュテッター　まあ。

枢密顧問官　わしは、君に子供がいるのか聞いてるんだ。

ブラントシュテッター　もちろんですよ。私は指物師の親方ですから。

枢密顧問官　男の子かね、女の子かね？

ブラントシュテッター　それが、はっきりとは言えないんです。

枢密顧問官　でも、君、そのくらいわかるだろ。

ブラントシュテッター　それが、私はたいてい作業所の方にいるもんでして。

ええ、娘は一人確かにおります、娘っ子一人、女の子一人、それから子供一人。

枢密顧問官　そうか。君は、息子はわしに似ていると思うかね？

ブラントシュテッター　坊っちゃんの方がお若いですが。

枢密顧問官　そりゃあ、年上のはずはないだろう。

ブラントシュテッター　年上ってことは絶対ありませんね。でも、私の考えを言わせてもらえれば、坊っちゃんは、より枢密顧問官夫人殿に、女房殿に、親密な女房殿に、親密夫人顧問に、あなたの秘密夫人——

枢密顧問官　わしの妻？　君は妻を知ってるのかね？

ブラントシュテッター　いいえ、存じ上げてはおりません。

枢密顧問官　それならどうして、坊やが妻の方に似てるって言うんだ？

ブラントシュテッター　ヴィンマーとこのゼップが奥さんを知ってるんです。披露されてたんですって。

枢密顧問官　披露？　わしの妻が？　ああ、わかった。トュルケン街のザーム写真館だな。

ブラントシュテッター　いえ、まったく別の場所でして。小話に出てたんですって。

枢密顧問官　失礼な。

坊や（アンテナ線をたくさん持って）　さあ、始めるぞ。僕のアンテナを張るんだ。でも、この緑の線を使うのか、茶色のを使うのかわからないな。

枢密顧問官　そんな古い線で何をするんだ？　捨ててしまいなさい。新しいのはどこだね？

坊や（古い線をブラントシュテッターの足元に投げつける）　新しいのも持って来てるよ。でも、これじゃ弱すぎはしないかな。

枢密顧問官　それで十分さ。早くするんだ。さもないと、サッカーの試合を聞きのがしてしまうぞ。

坊や（線の端を固定する。ブラントシュテッターのわきを通り過ぎる）　僕の金槌はどこ？　金槌が見つからないよ。（ブラントシュテッターの周りと枢密顧問官の周りを回り、それから反対の側へ行く）きっと、ファニーがまた置き忘れたんだな。

枢密顧問官　ほら、坊や、そこにあるぞ。

ブラントシュテッター（アンテナ線に巻き込まれているのを感じて）　助けてくれ！　助けてくれ！

枢密顧問官　坊や、おじさんの首が絞まってしまうよ、注意するんだ。

ブラントシュテッター（線をはずしてもらってから）　おかしな坊主だ。

枢密顧問官　君はその能無し頭をあっちこっちに伸ばしてたんだろう。この子の楽しみを台無しにしないでいただきたい。

坊や　そうだよ、アンテナが駄目になるとこだった。あんたが、そのぽんこつ頭を突っ込んだから。（アンテナ線をもう一方の側に掛け、ラジオをつけてみる。ガーガーと音がする）

枢密顧問官　スイッチを切りなさい！　切りなさい！

坊や　前とまったくおんなじたよ、パパ。

枢密顧問官　もう一本アンテナを張るんだ。この上を通すんだ。シャンデリアに留めつけて、向こう側にまた戻すんだ。

坊や　うん。そうすると、でも、線が足りないよ。（線を持って椅子の上、机の上、それからブラントシュテッターの頭の上に上がる）

ブラントシュテッター　こいつ、俺の頭の上に乗りやがった。

枢密顧問官　下りなさい、坊や。落っこちてしまうよ。ファニーにはしごを持って来させるから。――ファニー、大急ぎではしごを持って来てくれ。

坊や　はしごと金槌を。（ファニーははしごと斧を持って来る）

枢密顧問官　斧で何をするつもりだ？　金槌って言ったんだぞ、この馬鹿。

坊や　ほら、この線を持って行ってよ、馬鹿姉ちゃん。もう行っていいよ。（はしごを引き伸ばし、ブラントシュテッターを突き倒す。ブラントシュテッターはアンテナと、床に置かれてるたくさんの線にからまる。ブラントシュテッターは自分の傘をアンテナにつるし、それをモノレールに見立て、傘の後について走る。それから、座っていた椅子をはしごの横木の間に差し込む。坊やはそのいちいちに叫び声を上げる）

枢密顧問官　ブラントシュテッターさん、いい加減にして、座りたまえ！

坊や（はしごに上がる）　ねえ、パパ、僕、こんなおたんちんて見たことない。（アンテナ線をシャンデリアに掛ける）

枢密顧問官　そんなこと言うもんじゃない――でも、坊主の言うことは当た

ってるな。他に何とも言いようがない奴だ。ほら、下りて、今度は線を向こうの端まで張るんだ。さもないと接続できないぞ。（坊やは線をブラントシュテッターの頭上に投げつけ、はしごを下りる）

ブラントシュテッター　くたばれ！

枢密顧問官　たいしたことじゃないだろ、うすのろめ。（坊やは線を掛ける）はしごを持って行ってくれ、ファニー。何をぽかんと見てるんだね。（坊やとファニーははしごを運ぼうとする。ブラントシュテッターも引きずられて行く）待て、待て、君は残るんだ。どこに行くつもりだね？（ブラントシュテッターは肩をすくめる）

坊や　離れてよ！（ブラントシュテッターを突き落とす。ブラントシュテッターは椅子を調べる）

枢密顧問官　何を見とるのだ？

ブラントシュテッター　この中にモンターが入ってるんじゃないかと思いましてね。

坊や　モンター、モンター――モーターだろ。

枢密顧問官　無駄だよ、教えたって。こいつにわかるはずがないんだ。――そろそろ用件を片づけてしまおう。君はそもそもわしに何の用があるんだね？

ブラントシュテッター　私の窮状はまさに圧搾しておりまして、それで顧問官殿に、援助をお願い申し上げようと思いまして。貸付金ということで、およその額は――

（坊やがラジオのスイッチを入れる。その音楽の音が大きく、話し声が聞き取れない。坊やはラジオのスイッチを切る）

枢密顧問官　もっと大きな声で話してくれ、用件は何なんだね？

ブラントシュテッター　ちょうど、考えたところなんですが、金額は――

坊や（またスイッチを入れる――音楽――スイッチを切る）　これはウィーンからだ！

枢密顧問官　だから、もっと大きな声で話してくれ、聞こえないんだ。いくら欲しいんだね？

ブラントシュテッター　こんなクソ音楽がかかってちゃ、何も聞こえませんよ。

枢密顧問官　坊やはクソ音楽などかけんよ。

坊や　クソ音楽だって？　これはクソ音楽なんかじゃないぞ、ラジオ音楽だ。

（ブラントシュテッターの手を金槌でたたく）

ブラントシュテッター　いててて！

枢密顧問官　大げさだな、こんな坊やが小さな金槌で手をたたいたくらいで。――はっきり言って、わしはいつまでもあんたの相手をしてるつもりはないんだ。いったい、用は何なんだ？（坊やは三たび、音楽をつける。同時に電話も鳴り出す）坊や、スイッチを切るんだ、切りなさい。電話だ。

（坊やはスイッチを切る）

（枢密顧問官が話し出そうとすると、ブラントシュテッターがそのたびに「それでは、また来ます」と口をはさむ）

枢密顧問官　いい加減に静かにしたまえ、まったく。きょうは電話もかけられないのかね。

ブラントシュテッター　でも、今はあの蓄音機、鳴ってませんよ。

枢密顧問官　電話をしてるんだ！　黙っててくれたまえ。

坊や　黙るんだ、パパがかわいそうにいらいらしてるだろ。静かにしてよ！

（紙筒で頭をたたく）

枢密顧問官　坊や、静かにしなさい――口をつぐみたまえ。

坊や　そうだ、口をつぐみたまえ！（紙筒で机をたたき、立ち去る）

ブラントシュテッター　俺は邪魔だってことか？

枢密顧問官（電話口で）　はい、わかりました。後でおうかがいします、所長さん。すぐに運転手に言っておきます。まかせて下さい。失礼します、所長さん。（急いで立ち上がる）ちょっと失礼するよ、ブラントミラーさん。

ブラントシュテッター　ブラントシュティフターです、――ああ、いや、ブラントシュテッターです。

枢密顧問官　自分で自分の名前がわからなくなってしまったらしいですな。

ブラントシュテッター　あす、出直した方がよろしいですか？

枢密顧問官　いやいや、とんでもない。ここにいたまえ。すぐに戻るから。

（退場）

坊や（工具箱と絶縁テープを持って、入って来る）　さあ、急いでアンテナ

を仕上げてしまわなくちゃ。どいてよ。――（工具箱を床に投げ、はしごに上がる）これからアンテナの絶縁をやらなくちゃならないんだ。さもないとショートするからね。おじさん、手伝ってよ。工具箱を渡してくれない、頼むよ。

ブラントシュテッター　とんでもないね――でも、そうしてやらんと、あの親父、金をくれないだろうな。

坊や　工具箱をとってよ、のろまだな。

ブラントシュテッター　はしごから引きずり下ろすぞ。（工具箱を坊やに差し出す――中身が全部こぼれ落ちる）

坊や（工具箱をブラントシュテッターに投げつける）　こんな箱を渡すこともできないの、うすらとんかち。

ブラントシュテッター　もう我慢ならない！

坊や　パパに言うぞ。

ブラントシュテッター　お前のパパはどこに行ったんだ？

坊や　車庫だよ。運転手に指示を与えてるんだ。

ブラントシュテッター　すぐに戻るか？

坊や　ううん。

ブラントシュテッター　なら、俺たち二人きりなんだな。

坊や　そうだよ、二人きり。

ブラントシュテッター　そりゃ、いい。ちょっと下りて来い。（坊やは急いではしごを下りて、パパ、ファニー、と叫ぶ）おい、小僧、はなたれ、どうして、年上の者を敬わないんだ？　しつけがなってないな。

坊や　パパ！――ファニー！――厚かましいぞ！（書類を投げつける）

ブラントシュテッター（坊やを追いかける）　厚かましいとは何だ、生意気だぞ。（坊やをつかまえて、びんたを食らわせる。斧で殴る。坊やは泣き叫び、書き物机の下にもぐり込んで、大声を上げて泣く。ブラントシュテッターは机の下の坊やにあらゆる物を投げつけ、傘で突つく）ぼんぼんのパー助、デブ。俺を二度も椅子から突き落としたな。電線でもう少しで首を絞めるところだったな。金槌で手を殴ったな。お前、ドラ息子だろう。ろくでなし、恥知らず！

坊や　パパに言いつけてやる！

ブラントシュテッター　一言でも言ってみろ、その阿呆頭から耳を引きちぎ

ってやるぞ。お前がうちの子だったら、性根をたたき直してやるところだ。毎日、ストーブの鉄板の上に座らせてよ、このごろつき、与太者。

坊や　パパが来たら、覚悟しろよ。

ブラントシュテッター　黙れってんだ。ろくでなし、役立たずめ！

枢密顧問官（外から）　車のところで待っててくれ、すぐに出発するから。

（入って来る）あっちは片づいた。――この部屋はいったい、どうしたんだ？坊やはどこにいるんだ、わしの息子はどこだ？

ブラントシュテッター　知りません。では、失礼いたします。あしたまた参ります。

枢密顧問官　いや、待て、ここで何があったんだね。坊や！

坊や　ここ、ここだよ。

枢密顧問官　机の下にいるんだな。泣いている、どうしたんだろ。

ブラントシュテッター　隠れんぼをしてたんです。その時、頭をぶつけてしまいましてね。

坊や　えー、そんなのまるで出鱈目だ、こいつ嘘をついてる。

枢密顧問官　さっきまでとまるで様子がちがうな。坊や、出ておいで、どうしたんだね？

坊や　出られないよ、怖くて。

枢密顧問官　怖いって何だね。出て来なさい。

坊や　できないよ、すごく怖いの。

枢密顧問官　出て来るんだ。（坊やを引っ張り出す）さあ、何があったのか話しなさい。

坊や　こいつが――（ブラントシュテッターは坊やをにらむが、枢密顧問官が振り向くと、やさしい表情を作る）、見てよ、あんな顔で僕を見てる。

枢密顧問官（振り向く）　ほら、話しなさい。

坊や　うん、こいつが――また、にらんでる！

枢密顧問官　さあ、何があったんだね？　ここで何が起きたか、パパは知りたいんだよ。

坊や　それは――あ、また、にらんでるよ！

枢密顧問官　いい加減にするんだ。

坊や　うん、もう全部言っちゃうぞ、あんたが脅したって。もう、あんたなんて怖くないよ。あのね、パパがいなかった間、僕はとってもおとなしくて良い子にしてたんだ。そしたら、このおじさんが僕をはしごから引きずり下ろし、汚い言葉を浴びせかけ、それから、顔や頭を殴ったんだ。

枢密顧問官　何だって、君はうちの子供を殴ったのか？

ブラントシュテッター　思いもよらないことです。

坊や　ほんとだよ、こいつ僕を殴ったんだ。斧や傘で。それから、びんたもたくさん食らわせたんだよ。

ブラントシュテッター　考えられません。

枢密顧問官　よく聞け、うちの息子がこう言ってるんだ。そしてこの子はこれまで嘘をついたことがない。

ブラントシュテッター　枢密顧問官殿がお宅のろくでな……お宅のご令息の方を、年配の男の言うことよりもお信じになられるのなら――

坊や　そうだ、あんたは僕のことを、ろくでなし、デブのぼんぼんって言ったんだ。そうだ。それから、もし僕がパパに一言でも言いつけたら、両耳を引きちぎって、燃えてるストーブの鉄板の上に座らせるって言ったんだよ。

枢密顧問官　無礼者、あおびょうたん。うちの子にそんなぞっとするようなことを言うなんて、極悪非道の最たるものだ。

坊や　それから、まだ、僕はごろつきで与太者なんだって。

枢密顧問官　あ、あ、あ、あ、――それで、よくも、わしに借金など持ち出せるな――

ブラントシュテッター　できれば、百五十マルクお願いしたいんです。

枢密顧問官　黙れ！　君は請願者だと言って上がり込んどいて、まるで、辻強盗じゃないか。気をつけろ。でも、金は用立ててやる。こっちへ来たまえ。でも、単に君からもう解放されたいためだがね。ここに署名してくれ。百五十マルクを三カ月の期限で貸してやる。担保は君の作業所だ。在庫品込みでな。それから利子少々、そうだな十五マルクだ。よし、さあ、署名したまえ。（領収書をブラントシュテッターの前に置く。ブラントシュテッターは鉛筆を取って、署名する）

坊や（その鉛筆をひったくって）　僕の鉛筆だ。

枢密顧問官　坊やの言う通りだ。ペンを使いなさい。（ブラントシュテッターは署名する）

坊や（ブラントシュテッターを背後から押す。インク壷がひっくり返る）　僕があんたに鉛筆を貸すとでも思うの？

枢密顧問官　気でも狂ったのか、わしの重要な書類の上にインクをぶちまけるなんて。うすのろ、間抜け。そのうえ、わしまでインクまみれだ。もううんざりだ。

ブラントシュテッター　まだでしょう。（吸い取り紙で顧問官の顔一面をぬぐう。顧問官は罵る。ブラントシュテッターは両手を飾り用の卓上布でぬぐう）

枢密顧問官　そんなことするんじゃない、不潔な奴だ！（引き出しを開け、金をつかみ出す）

坊や　こいつに仕返しするいい考えが浮かんだぞ。僕にあんなにひどいことをしたんだもの。（紐をブラントシュテッターの腕に結わえつけ、その紐のもう一方の端を高価そうな陶製置物に結びつける）これがその罰だ。あんなに無礼だったんだもの。（顧問官のそばに行く）

ブラントシュテッター（紐を結びつけられている間、腕を高く差し上げている。それから口を開く）　あのう、顧問顧問官殿――

枢密顧問官　静かに！（金を数えながら机に置く）さあ、もう帰ってくれたまえ。

ブラントシュテッター　ありがとうございます、枢密顧問官殿。どうか悪しからず。

枢密顧問官　わかった、わかった。行ってくれ。（握手の手を差し出す）元気でな。

（ブラントシュテッターがその手を握ろうとすると、紐がピンと引っ張られ、置物が落下する。――長い沈黙）

坊や（机の上に跳び上がる）　やった、こいつ、あの立派な置物を落としちゃった。

ブラントシュテッター　私が？

枢密顧問官　そうだ、君が置物を壊したのだ。

ブラントシュテッター　私が？　きっと貨物自動車が通りがかったんですよ。

坊や　へっ、貨物自動車！

ブラントシュテッター　私は一歩も動いてないですよ。

枢密顧問官　君、ひょっとして、わしだって言うつもりかね？

坊や　それとも、僕だって言うつもりかね？

ブラントシュテッター（腕につけられた紐を見つける）　見て下さい、枢密顧問官殿。お宅のろくでなしのごろつきが、私に――

枢密顧問官　坊や、わしには信じられんよ。

坊や　ハハハ、この紐はこいつが自分で腕に巻きつけたんだよ。

ブラントシュテッター　このくそガキ！

枢密顧問官　何だって？　わしのことか？

ブラントシュテッター　いえ、後ろの奴ですよ！

枢密顧問官　乱暴はよしたまえ、さもないと水道、いや、機動隊を呼ぶぞ。君は、この置物がいったいいくらするのか、知ってるのか？　三百マルクだぞ。君に弁償してもらうからな。

ブラントシュテッター　私のような貧乏人がどうやったら三百マルクも払えるんです？　せいぜい、今いただいたばかりの百五十マルクをお渡しできるだけですよ。残りは分割払いにしていただくしか……（金を机の上に置く）あー、何てこった、何てこった。

枢密顧問官　他人の家でよくもこんな振る舞いができるもんだ。出て行け。

（ラジオから信号音）

坊や　静かにして。サッカーの試合だ。

（スピーカーからの声）「ウィーンでの国際サッカー大会中継の前に、クニッゲ博士〔訳注　一七五二～九六、ドイツの著述家、行儀作法の著書で有名〕の講演「子供のしつけ方」をお送りいたします」

ブラントシュテッター　静聴するんですな、枢密顧問官殿、きっとお役に立つでしょう。